

保育者養成における歌唱指導についての一考察

—正しい音程で歌うことができない学生への指導の実践例を通して—

中野 亮子 (近畿大学九州短期大学)

A Study on the Teaching of Singing in the Training of Nursery School Teachers
—Through practical examples of teaching students who cannot sing at the correct pitch—
Ryoko Nakano (Kyushu Junior College of Kindai University)

要旨

保育者養成において、歌唱は重要な技能の一つであるが、音程を正しく取れない学生は、声を出すことを控えたり、音楽活動そのものを避けたりするケースも見られる。正しい音程で歌えない原因は主に発声技術の問題、もうひとつは音程感覚の欠如であると言われている。指導者は、学生がなぜ音程を正しく取れないのかを見極める必要がある。本稿では、音程感覚に関する調査と、実践例を通して効果的な指導法を考察する。

キーワード：保育者養成，音楽教育，歌唱指導，音程

Abstract

Singing is one of the most important skills in the training of child care providers, but it has been observed that some students who cannot get the pitch right refrain from speaking or avoid musical activities themselves. It is said that the main cause of students' inability to sing at the correct pitch is a problem in vocal technique, and the other is a lack of pitch sense. Instructors need to determine why students are unable to get the pitches right. This paper examines effective teaching methods through a survey of pitch sense and practical examples.

Keywords : Caregiver Development, Music Education, Singing Instruction, Intervals

1. はじめに

歌唱は自分の身体のみで成立する身近な音楽活動の一つであり、音の高低やリズムを楽しみながら、聴覚や発声機能を発達させ、言葉の理解や発音を身につけることにもつながる。また、歌唱を通じて、感情を表現することが、自己肯定感や情緒の安定を促すものである。さらに、集団での歌唱活動を通して協調性や社会性を育み、音楽に親しむことで、創造性や想像力も豊かになる。このように、歌唱活動は幼児の言語、感情、社会性、音楽的感性など、総合的な発達を促すために重要な役割を果たしており、幼稚園指導要領の中でも重要視されてい

る。

そのため、保育者は子どもたちの手本となるような歌唱をすることが必要となる。筆者が勤務する保育者養成校でも、一部の生徒に音程を正しく取れない問題が見受けられる。実際の保育現場でも、先生の音程が不安定だと子どもたちが戸惑い、落ち着きがなくなるという声が上がっている。

正しい音程で歌えない原因は主に発声技術の問題、もうひとつは音程感覚の欠如であり、これらが混在することもある。

そのため本稿では、学生の音楽活動、歌唱、発声に対する意識調査の結果を踏まえ、音程感覚と発声における問題に焦点を当てて調査と考察を行った。

2. 学生の音楽活動に関する調査

1) 目的

研究対象は、保育者養成の専門学校で、音楽専門の教育機関ではない。そのため、これまでの音楽活動への関わりや、また歌うことへの親しみ具合を調べるため、紙面によるアンケート調査を行った。

2) 調査対象及び実施期間

筆者が指導にあっている専門学校の保育科1年生17名、2年生8名、合計25名。2024年4～5月に行った。

3) 質問項目

質問内容は、これまでの音楽活動への関わり方や、日常で歌唱やそれ以外で声を出すことへの意識を調査するため、以下の内容とした。

- ①これまでの音楽経験について
- ②カラオケが好きか、カラオケをする頻度について
- ③日常で鼻歌を歌うことがあるか
- ④身近な人で歌うことが好きな人がいるか、その人に自分は影響を受けているか
- ⑤自分は人と比べておしゃべりな方だと思うか

①これまでの音楽経験について

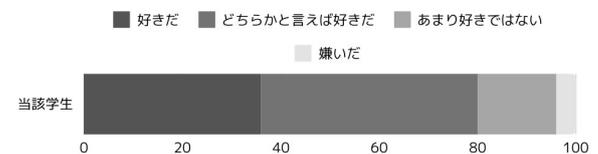
専門学校に入学してからは全員が週に一度ピアノと歌の授業を受講するので、それを除いた経験について調査した。

習い事やクラブ活動、趣味でなんらかの楽器を演奏した経験があると答えた学生は13名(52%)、全く経験がないと答えた学生は12名(48%)であり、大きな差は見られなかった。演奏したことのある楽器で最も多かったのはピアノで7名、他はギターが2名、チューバ1名、ヴァイオリン1名、サクソ1名である。楽器の種類を複数回答した学生は2名であった。

②カラオケに対する意識

学生が身近で歌う機会として考えられるのがカラオケであるため、カラオケに対する意識を調査した。その結果、「カラオケが大好きだ」と答えた学生は9名(36%)、「どちらかといえば好きだ」と答えた学生は11名(44%)と最も多かった。「あまり好きではない」と答えた学生は4名(16%)、「嫌いだ」と答えた学生は1名(4%)のみであり、否定的に捉えている学生は全体の2割程度であった。(図1)

〈図1〉 カラオケは好きか？ (単位：%)

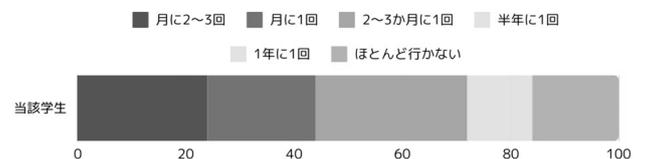


普段の集団授業では、2年生は全員大きな声で楽しく歌うことができるが、1年生はなかなか声が出せず、個人レッスンでやっと声を出す生徒が多いので、この結果は筆者にとっては意外であった。

また、カラオケをする頻度は「2～3か月に1回」と答えた学生が最も多く7名(28%)、以下順に「月に2～3回」が6名(24%)、「月に1回」が5名(20%)、「ほとんどしない」が4名(16%)、「半年に1～2回」が2名(8%)、「1年に1回」が1名(4%)であった。(図2)

〈図2〉どれぐらいの頻度でカラオケに行くか？

(単位：%)



比較対象として、カラオケを展開する株式会社第一興商による「カラオケに対する意識調査(2024年1月)」によると、15～19歳で「週1回以上」「2～3週に一回程度」「月1回程度」と答えた割合は合計で26.1%、20代で17.5%ということである。(図3)これと比較してみると、当該学生で月に一回以上カラオケに行く学生は合計すると11名(44%)である

保育者養成における歌唱指導についての一考察

ため、多くの学生がカラオケをしているといえる。

〈図3〉株式会社第一興商による調査
カラオケボックス利用頻度

年齢別	n	M: 週1回未満～月1回以上				L: 月1回未満～年1回以上			
		週1回以上	2～3回に1回程度	月1回程度	2～3月に1回程度	半年に1回程度	年1回程度	2～3年に1回程度	3年に1回未満
15～19歳	1,614	2.3	7.3	16.5	24.5	18.0	10.4	5.1	16.0
20代	3,416	2.2	5.4	8.9	16.9	15.8	11.3	5.8	32.7
30代	4,076	2.3	5.3	7.8	9.9	8.3	4.5		58.4
40代	5,663	3.0	5.2	6.2	6.8	4.0			72.1
50代	5,214	2.3	3.5	5.0	4.9	3.7			79.2
60代	4,532	2.6	4.6	4.3	2.8				92.7

③日常で鼻歌を歌う頻度

多くの人は「歌おう」と意識しなくても、日常生活の中で無意識のうちに鼻歌を歌うことがあるのではないだろうか。日常生活の中で、鼻歌を歌うことがあるかを質問したところ「気づいたらいつも」と答えた学生は7名(28%)、「時々」が最も多く10名(40%)、「たまに」が8名(32%)であった。「鼻歌は歌ったことがない」と答えた学生は一人もいなかった。歌うことに苦手意識を持つ学生もいるなか、この結果も筆者にとって意外なものであり、日常の中に歌うことが自然と溶け込んでいることを示唆している。

④身近な人からの影響

身近な人で、歌うことが好きな人はいるか、それは誰かを質問したところ、「歌うのが好きな人は身近にいない」と答えた学生は1名(4%)のみであった。身近で歌うのが好きな人は誰かを複数回答可で質問したところ、最も多かったのが「親しい友人」で17名、順に「親」が12名、「兄弟姉妹」が11名、「交際相手」が5名、「おじ・おば」が2名、「祖父母」が1名であった。

また、自分はその人に影響を受けていると思うかを質問したところ、「とても影響を受けている」と答えた学生が7名(28%)、「少し影響を受けている」が最も多く11名(44%)であった。一方、「ほとんど影響を受けていない」が3名(12%)、「全く影響を受けていない」が4名(16%)であり、7割以上の学生は身近にいる歌が好きな人に影響を受けていると感じていることがわかった。

⑤声を発することに対する意識

「歌うこと」も「話すこと」も声を出すという点では共通しているが、「歌う」となると緊張してしまうこともあるだろう。そこで、声を出すという行為について自分はどのように捉えているかを調査するため、「自分は人と比べておしゃべりだと思うか」と質問したところ、「とてもおしゃべりだ」と答えた学生は9名(36%)、「まあまあおしゃべりだ」が最も多く12名(48%)、「あまりおしゃべりではない」が4名(16%)であり、8割以上の学生は、人と比べておしゃべりだと感じている。つまり、声を出すという行為自体には抵抗がない学生がほとんどだといえる。

3. 音程感覚に関する調査

1) 目的

音程を正しく歌うためには、そもそも音から「高低」を感じ取る感覚と、それを正しく再現する技術が必要となる。次の調査では2つ以上繋がる音程の高低を正しく知覚することができるかどうかを調査した。

小畑(2015)によると、一般的に用いられている「音程」という言葉には「音高」と「音程」の二つの意味が含まれている。「音高」は音そのものの高さで、その高さの概念は周波数の大小を高低として捉える一般的な感覚である。一方、「音程」は2音間の音の隔たりのことを言い、例えば「ドレ」と「レミ」の音程はどちらも長2度である、という言い方をする。

この調査でいう「音程」とは前者の意味合い、つまり複数の音の「音高」を正しく捉えて、どちらが高く、どちらが低いかを認識できるかどうかの調査である。

2) 調査対象及び実施期間

「2. 学生の音楽活動に関する調査」と同じく、筆者が指導にあたっている専門学校の保育科1年生17名、2年生8名、合計25名。2024年6月に行った。

保育者養成における歌唱指導についての一考察

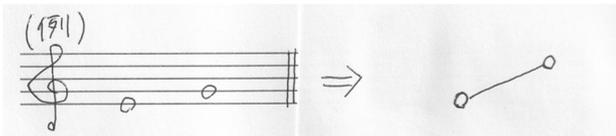
3) 調査項目

複数の連続する音を聴き、それらの音の高低の関係を正しく知覚できるかの調査を行った。音はピアノの音と、声の両方で行った。

- ①2音（ピアノ）
- ②2音（声）
- ③3音（ピアノ）
- ④3音（声）

音の高さを折れ線グラフで示し（図4）、3つの選択肢から正しいものを選ぶ方法を取った。（図5）

〈図4〉 連続する2音の表し方



〈図5〉 出題方法

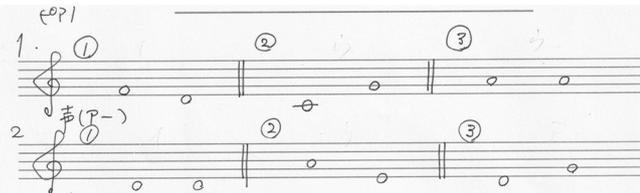
1. 二つの音をピアノで続けて弾きます。二つの音の関係は図に表すとどうなるか、ア～エから一つ選んでください。

- ① ア イ ウ エ わからない
- ② ア イ ウ エ わからない
- ③ ア イ ウ エ わからない

①2音間の音の隔たり

次に示す楽譜1の音をピアノで弾き、あるいは筆者が母音「ア」で歌い、2音の関係を示すグラフを選択する問題を3題出題した。結果は表1の通りであった。

〈楽譜1〉



〈表1〉 2音間の隔たり正誤表 (単位：人)

	第1問		第2問		第3問	
	○	×	○	×	○	×
1 ピアノ	23	2	24	1	24	1
2 声	23	2	24	1	24	1

ピアノで弾いた場合も歌声の場合も、正誤の数は同数であった。誤答の学生は、全問不正解が1名、1問不正解が2名という結果であった。

全問不正解の学生は、歌唱時に音程が合わないなどの問題はない学生である。1問不正解の学生のうち、1名は歌唱時に音程が取れないが、もう1名は歌唱時の問題はない学生である。

②3音間の音の隔たり

次に示す楽譜2の音をピアノで弾き、あるいは筆者が母音「ア」で歌い、3音の関係を示すグラフを選択する問題を3題ずつ出題した。（楽譜2）結果は表2の通りであった。

〈楽譜2〉



〈表2〉 3音間の隔たり正誤表 (単位：人)

	第1問		第2問		第3問	
	○	×	○	×	○	×
3 ピアノ	23	2	24	1	24	1
4 声	23	2	24	1	24	1

ピアノで弾いた場合も歌声の場合も、正誤の数は全く同数であった。誤答があった学生は、6問中全問不正解は1名、5問不正解が2名、2問不正解が1名であった。このうち、歌唱時に音程が取れない学生は、5問不正解の2名中の1名と、2問不正解の学生1名であった。（表3、網掛けの回答パターン）

〈表3〉 3音間の隔たりで不正解が多かった学生の回答パターン

	学生ア	学生イ	学生ウ	学生エ
3 ピアノ①	×	○	×	×
ピアノ②	×	×	×	○
ピアノ③	×	×	×	○
4 声①	×	×	○	×
声②	×	×	×	○
声③	×	×	×	○

4) 音程感覚に関する調査のまとめ

小畑(2015)をはじめ多くの先行研究で明らかにされているように、音から「高低」を感じるのは、生得的な感覚ではなく、学習によって得られた感覚である。

「2. 学生の音楽活動に関する調査」で述べたように、楽器の演奏経験がある学生は、調査対象学生の約半数程度であった。しかし、楽器の演奏だけでなく、学校の音楽の授業や、日常生活の中で音楽に触れる機会があるため、多くの学生が音の高低を学習することができているようだ。その一方で、3音間の音程の高低を正しく答えられなかった生徒が4名いた。そのうちの3名が、歌唱時に音程を正しく取ることが難しい学生であった。残りの1名は音程の高低を正しく知覚できなかったが、歌唱の際には正しい音程で歌えていた。このことから、音程を正しく知覚できることが、必ずしも歌唱時の音程の正確さに直結しないことがうかがえる。

4. 音程を正しく取れない学生への指導実践例

指導の実践例として、「朝の歌」と「おかえりのうた」を取り上げる。この曲は、授業の始まりと終わりに全員で必ず歌うもので、保育現場でも全国的に広く歌われている。曲の音域は「一点ハ」から「二点ハ」（ハ長調の場合）と比較的歌いやすく設定されている。男声の場合は一オクターブ低い音程で歌われる。

しかし、この歌を正しい音程で歌えない学生も複数いるため、本項ではそのような学生への指導の実践記録をまとめる。

1) 楽曲解説

「朝の歌」増子とし作曲 本多鉄磨作曲（楽譜3）

<楽譜 3>

「おかえりのうた」天野蝶作詞 一宮道子作曲（楽譜4）

<楽譜 4>

2) 指導実践記録

①学生 A（1年生、女性）

〔概観〕

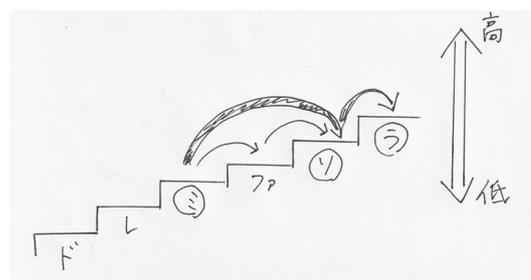
元気よく、リズムを正しく歌うことができるが、音程が跳躍するところで、音を外してしまう。音程感覚の調査は全問正解であった。

〔指導内容〕

「朝の歌」の「おはなもにこにこ」の部分や、「おかえりのうた」の「せんせいさよなら」の部分の跳躍進行のところで、音程が定まらない。本人は「音程がちょっと違うかも？」という認識であった。

そのため、音程の幅がどれくらい違うのかを階段に例えて説明し、「おはなも」のところは、「ミソラソ」だから、2段上がって、1段上がって、1段下がって、と説明し、本人もその階段を見ながらゆっくり音程を取っていったところ、徐々に音程の幅の感覚を掴んでいった。（図6）

<図6>音程の幅をイメージする階段



「おかえりのうた」の「さよなら」の「ラソドラ」のなかでも特に「ソド」の4度の跳躍がつかみにくかった様子であったが、「階段を4段飛ばしするときにはたくさんジャンプするのと同じですね」と本人が話したのをきっかけに、音程を正確に取って歌うことができるようになった。

保育者養成における歌唱指導についての一考察

この学生は、音程の高低の感覚は備わっていたので、音の高さや、音程の幅を「階段」に例えて理解できたことが、大きな成果であった。

②学生 B (1年生、男性)

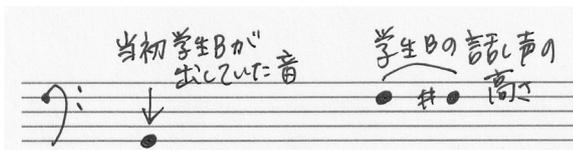
〔概観〕

歌おうとすると話し声より低い声で押し付けてしまう。「は」～「ハ」の幅で「朝の歌」も「おかえりのうた」も歌おうとしていたが、喉がゴロゴロいうような音しか出すことができない。音程感覚の調査は全問正解であった。

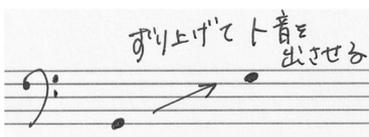
〔指導内容〕

まず、学生 B が歌おうときに出そうとしている音は、普段の話し声よりもかなり低い音であることを教えるため、普通に話す文章の途中で母音を伸ばさせて、その音が大体どのあたりの音になるのかをピアノで示した。

「僕は今日昼ごはんはラーメンを…」と話す途中で「ラー」の音を伸ばさせると、大体「へ」～「嬰へ」辺りの音程であることが分かった。そのため、無理なく歌うためには、自分の話し声と同じぐらいの高さの音を出すようにピアノで音程を取りながら説明した。しかし、筆者が歌うときは、さらにそれよりも一オクターブ高い音域だったため、混乱してしまった。そこで、筆者も一オクターブ下げて学生と同じ音域で歌うようにした。



次に、歌声として出していた、「と」から徐々にずり上げて、無理のない音程の「ト」まで上げていったところで、その声を基準に歌の音程を取り直した。そもそも学生 B も音程感覚は備わっていたため、それからは音程を正しくとって歌うことができた。



この学生の話によると、「変声期にコロナウイルスの感染対策で歌っていなかったため、歌声の出し方が分からなくなってしまった。声が低くなったから、歌うときもなるべく低い声で唸るように出すものだと思っていた」ということである。

一週間経ってまた歌ったときには、また低い声に戻ってしまったが、そこからずり上げて無理のない高さまで上げていったところ、感覚を取り戻し、無理のない音域で歌うことができた。

③学生 C (1年生、女性)

〔概観〕

学生 B と同じく、歌おうとすると話し声よりも低い声を無理に出そうとし、1オクターブ下の音域で歌おうとする。音程感覚の調査は全問正解であった。

〔指導内容〕

学生 C は歌うことへの恥ずかしさから、低い声で歌ってしまうと話していた。そこで、「保育士として子どもたちの前に立った時に、あなたは本当にその声で歌うの？」と問いかけ、考えさせた。見学にした保育所の子どもたちを思い出させ、その子どもたちに向けて優しく歌うように指導したところ、声楽的な技術指導を行っていないにもかかわらず、自然に裏声を上手に使って歌うことができた。

学生 C にとって、授業という環境で歌うことへの恥ずかしさが大きな壁であったことが分かった。

④学生 D (1年生、男性)

〔概観〕

学生 B や C と同様に、この学生も歌う際に話し声よりも低い音を出そうとし、音程が取れず、歌詞をリズムに合わせて言うだけになっていた。本人は、学生 B と同様に「声変わりしてから歌ったことがないため、歌い方がわからない」と話していた。また、歌うことが好きではなく、周りにも歌が好きで人はいない、と答えた唯一の学生である。

音程感覚の調査では、2音間の音程は全問正解だったが、3音間の音程では6問中2問不正解。第3項3)の調査項目「3音間の隔たり」での学生エであ

保育者養成における歌唱指導についての一考察

る。

〔指導内容〕

学生Dは筆者の歌声を真似しようとして、無理に女声の音域を出そうとしていたため、高音が出ないと諦めていたようだ。

「朝の歌」や「おかえりのうた」の最初の音は、男声の場合「ト」だが、学生Dが歌声として出していた音は、学生Bと同様に、一オクターブ低い「と」近辺の音であった。そこで、他の男子学生に一オクターブ上の「ト」を歌ってもらい、これに合わせるよう指導した。学生Bの時に用いた、音をずり上げる方法がうまくできなかったため、「下から上にジャンプするように高い声を出してみよう」と、手を下から上に跳ね上げる動作を交えて指示した。すると、「と」から「ト」近辺の音まで声を上げることができた。

学生Dは、それまで「ト」ほどの高さの声を出したことがなかったため驚いていたが、「これまで出していた声よりも楽に出せる」と気付いたようだ。学生Dには「ジャンプする感覚」がしっくりきたようだ。

⑤学生E (1年生、男性)

〔概観〕

話し声も歌声もハスキーボイスである。「ハ」～「ト」の音程は正しく歌うことができるが、「イ」以上の音を出そうとすると声がかすれて出ない。上手に歌えるようになりたいという強い意志がある。

音程感覚の調査は、12問中7問不正解。特に3音間の音程感覚はすべて「わからない」で回答。第3項3)の調査項目「3音間の隔たり」での学生Aである。

〔指導内容〕

学生Eは「朝の歌」「おかえりのうた」両方とも、歌い出しは正確に歌えたが、音域が狭いため、一曲を通して歌うことができない。音程感覚の調査では「わからない」と答えているが、実際の歌声は正しい音程を取れているので、いわゆる音痴ではないと考えられる。

この学生の場合は、話し声も歌声もかすれていて、音量があまりないので、まずはしっかりとお腹

から声を出してみるように指導した。性格的に普段から大きな声を出すことが少なく、声を出すことに抵抗がある様子だったが、保育士には声のボリュームが求められることを伝えたとこ、本人も理解して努力している。

練習方法として、みぞおちに両手を当て、その手を押し返すように力をいれながら、「アー」と発声する練習を行った。最初は息漏れがあったものの、繰り返すうちに少しずつ声のボリュームが増してきた。コツをつかんだところで、「朝の歌」の最後の「おはよう、おはよう」の部分で歌わせたところ、かすれた声ながらも、高い「一点ハ」が少し出るようになった。

ハスキーボイスの原因を探るために耳鼻咽喉科を受診することも選択肢の一つではあるが、今後もお腹に力を入れて、少し大きめな声を出すことに慣れていくよう、継続して指導していきたいと考えている。

⑥学生F (2年生、男性)

〔概観〕

歌唱可能な音域が狭く、「ト」よりも高い音程を出すことができない。声が小さく、諦めがち。自分で音程を取れない。

音程感覚の調査は、2音間は全問正解。3音間は6問中5問不正解であった。第3項3)の調査項目「3音間の隔たり」での学生ウである。

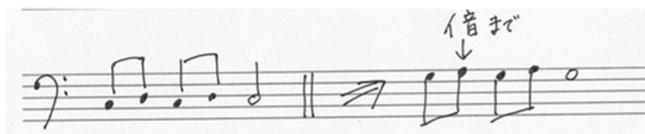
たまに鼻歌を歌うことはあっても歌うこと自体があまり好きではなく、抵抗感が強い。

〔指導内容〕

「朝の歌」も「おかえりのうた」も、歌うというよりは、歌詞をリズム通りに口先で唱えているような状況であった。

「朝の歌」では歌い出しの「せんせいおはよう」は歌うことができた。しかし、「みなさんおはよう」で「一点ハ」に上がることができず、そこから音程がなくなってしまった。

個人レッスンでは、発声練習として次の音型で半音ずつ上げていき、上がれるところまで継続した。



その結果、「イ」までは出すことができた。

またこの学生は声量が小さく、子どもたちの集団に声が届く音量ではないため、「子どもたちに届くように、しっかりと声を出してほしい」と伝えた。しかし本人は「話すのは平気だが、歌うことには抵抗がある」と感じているようだ。まずは時間をかけて歌うことへの抵抗感をやわらげ、気持ちの切り替えを促すことが必要だと考えている。

3) 学生への指導実践から見えた問題点と解決策

筆者が指導している学生たちの多くは、音の高低を知覚することができているようだが、音程を正しく歌えない原因は、単に音程の知覚に問題があるだけではないことがわかった。

学生が正しい音程で歌うことができない原因として、次の4点が考えられる。

1. 音程の幅をイメージできていない
2. 自然に出せる音域よりも低い音域で歌おうとしている
3. 歌う際の声の出し方や力の入れ方が分からない
4. 歌うことへの抵抗感がある

これらの問題に対し、以下の方法で指導を行ったところ、効果が見られた。

1. 音程の幅を明確に理解させる

階段の図を使って音の高さの変化を視覚的に説明した。

2. 自然な声域で歌うことを意識させる

歌声を特別なものと捉えず、普段の話し声に近い音域で歌うように指導した。

3. 発声時の力の入れ方を具体的に指導

声を出す際に力を入れる場所を具体的に説明し、実際に練習させた。

一方で、4. の「歌うことへの抵抗感」は簡単に克服できるものではない。性格や考え方、環境など多くの要因が影響するため、長期的な指導が必要である。歌うことは保育者にとって大切なスキルの一つなので、その重要性を伝えながら、各学生の状態に合わせた指導を継続していきたいと考えている。

5. おわりに

筆者が担当する授業では、初学者のピアノ演奏技術の向上に時間を割く必要があり、声楽技術の指導に十分な時間を確保するのが難しく、集団での歌唱指導が中心になることが多い。そのため集団での歌唱では、歌うことが得意な学生の声が目立ち、多少の音のずれがあっても見過ごすことがあった。

今回の調査では、個人レッスンを通して学生一人ひとりの歌唱を聴くことができた。その結果、音程を正しく取れない学生が、それぞれどのような問題を抱えているのか、またそれをどのような方法で解決していくべきかを検討する機会を得られたことに、大きな意義があると感じている。

限られた時間の中でも、将来、学生たちが自信を持って子どもたちの前で歌えるように、指導方法のヴァリエーションを増やし、さらに効果的な指導を続けていきたいと考えている。

文献

文部科学省(2018)「幼稚園教育要領解説」フレーベル館

磯部哲夫(2018)「保育者養成課程における歌唱に関する研究～女性の地声と裏声の発声法と歌唱法～」郡山女子大学紀要第54号

小畑千尋・高木夏奈子・木村升美(2020)「幼児の表現活動を支える保育者の歌唱に対する認知—保育者養成における「音痴」克服のピアサポート事例の分析を通して—」宮城教育大学紀要第54巻

保育者養成における歌唱指導についての一考察

小畑千尋(2007)「「音痴」克服の指導に関する実践的研究」多賀出版

小畑千尋(2015)「オンチは誰がつくるのか」パブラポ

小畑千尋(2017)「さらば！オンチ・コンプレックス」教育芸術社

高奈奈(2022)「保育士養成課程における歌唱表現の指導：学生の音声データから見えてきたこと」神戸親和女子大学神戸親和女子大学教職課程・実習支援センター研究年報第5巻

松田扶美子(2019)「保育者養成における歌唱指導の導入～動物の鳴き声を真似することからの試み～」音楽教育メディア研究第5巻

諸井サチヨ(2016)「保育者養成校における歌唱指導について—学生の歌うことに関する意識調査をもとに—」淑徳大学短期大学部研究紀要第56号